

# 天使たちの課外活動6

テオの秘密のレストラン

茅田砂胡

*Sunako Kayata*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

## 1

その日、カトリンは店舗の端末を開き、いつものように本日こんだての献立を掲示板に書き込もうとした。

義父の飲食店『テオドル・ダナー』は、一時は休眠状態だったが、義父が店を再開して以来、この掲示板を訪れる人は後を絶たない。

特に本日の献立は重要である。

義父は食材を仕入れてから、その日何を出すかを決めているからだ。

今日は何やら珍しい民族料理でいくらしい。

料理の名前を聞いてもカトリンにはそれがどんなものなのか、さっぱりわからなかった。

急いで調べてみると中央銀河から遙はるか遠く離れたラネーザという辺境宙域の料理である。

それをつくれるということは義父は食べたことがあるわけで、いつたいてどこで食べたのかと思った。いつものことながら、料理に関する義父の知識と造詣ぞうけいの深さには驚嘆きょうたんさせられる。

今日の昼食は自分もちゃんと代金を払って、一食譲ってもらおう。楽しみにしながら端末に向かったカトリンだったが、掲示板を開いて眼を見張った。呆気あっけにとられて自分の店の掲示板を見つめ、我に返って思わず叫んだ。

「ヨハン！ ちょっと来て！」

妻の悲鳴に驚いて、奥の厨房ちゅうぼうからヨハンが現れた。

「どうした？」

ヨハンは二十二歳、その妻のカトリンは二十一歳、学生と言っても通るような若い夫婦である。

夫を見やって、カトリンは呆然ぼうぜんと言った。

「うち、休業するの？」

「は？」

若々しいヨハンの顔がきよとなる。

カトリンは端末画面を示した。

訝<sup>いぶか</sup>しみながらヨハンが見てみると冒頭に大きく

『テオドール・ダナー休業のお知らせ』とある。

ヨハンも眼を疑った。

「何だこれ!!」

店の料理人として働いているヨハンが知らない、寝耳に水の情報である。

同じく給仕係のカトリンも知らない。

「今開いたらこうなってたの。どういうこと?」

「こっちが訊<sup>き</sup>きたいよ!」

『テオドール・ダナー』はヨハンが言うのも何だが、大繁盛<sup>だいはんじょう</sup>している料理店だ。

カウンターを入れても全二十五席だから、決して大きな店ではないが、営業中は店の外にいつも長い行列ができるほどの超人気店である。

それがいきなり休業とある。

しかも従業員の二人がその事実を知らない。

となると、この店の主<sup>あかし</sup>でありヨハンの実父である

テオドールに尋<sup>たず</sup>ねるのが順当と言えば順当なのだが、若い夫婦は揃<sup>そろ</sup>って嘆息した。

(親父に訊いても……)

(たぶん、無駄<sup>むだ</sup>だよね……)

互いの眼を見交わしただけで、それがわかったが、一応は訊いてみることにする。

テオドールは昔気質<sup>むかしかたぎ</sup>の頑固<sup>がんこいつつ</sup>一徹の料理人である。

料理の腕は超一流——ほとんど神がかりの域だが、日常生活や常識に関してはまったくの無能だ。

さらに彼は料理の邪魔をされることを何より嫌う人物でもあるが、幸い仕入れから帰ったばかりで、まだ調理には取りかかっていない。

ヨハンは厨房の父親に声をかけ、掲示板を見せて、恐る恐る問いかけた。

「……うち、休業するのか?」

テオドールは掲示板をちらつと見て、逆に訊いた。

「何で休むんだ?」

「だからそれを知りたいんだってば!」

店主とその息子の会話とはとても思えない。

何とも間抜けなやりとりである。

カトリンは独り言のような口調で言った。

「誰か他にこの掲示板をいじれる人がいるの？」

ヨハンが手を振って否定する。

「まさか。これはもともと母さんが始めたものだし、更新の権限を持ってたのも母さんだけだぜ」

「そうよね。お義母さんが亡くなった後、わたしが再開するまで一度も更新されてなかったし……」

どうしたものかと思案していると、開店前の扉が慌ただしく開き、息せき切って人が飛び込んできた。

「休業とはどういうことだ!？」

「パラデューさん!」

ものすごい勢いで現れたのはテオドールの亡き妻アンヌの父、シメオン・パラデューだ。

ヨハンにとって実の祖父だが、初めて会ったのがついこの間なので、なかなか『おじいちゃん』とは呼びにくいのである。決して怖い人ではないのだが、

共和宇宙でもつとも著名な投資家十人に数えられるパラデューには自ずと滲み出る威厳と貫禄があり、それが近寄りたいたい雰囲気醸し出している。

実の祖父であっても、お世辞にも親しみ易いとは言えない人なので、敬称のほう呼びやすいのだ。

そんなパラデューはテオドールの料理の熱狂的なファンである。

七十代の今でも大勢の部下を従えているが、彼が仕事の拠点にしているのは連邦本拠地の中央座標だ。

一方のここは連邦大学惑星、正式名称をティラ・ボーンという。中央座標とは別の惑星である。

交通の便がいいので、日帰りの恒星間旅行という無茶も不可能ではないのだが、まさに寸暇を割いてわざわざこの店を訪ねてくる。

そんなパラデューにとって休業の知らせは青天の霹靂だったのだらう。血相が変わっている。

「さっき掲示板を見たんだ。何事だ!？」

鬼気迫る勢いでテオドールに問いかけたが、彼は

黙って突っ立っているだけだ。

代わりにヨハンが困惑しながら正直に答えた。

「それが、心当たりがないんですよ。親父は今日も普通に仕入れに行つたし……」

カトリンも頷いた。

「献立を書き込もうとしたらこうなつてたんです」

パラデューは顔をしかめた。

「そんな馬鹿な話があつてたまるものか。掲示板が自動で更新されたとも言うのか」

「そうなんですよね……」

相槌を打ったカトリンは何気なく端末に眼をやり、  
驚愕して叫んだ。

「また更新されてる!」

「何だって!」

テオドル以外の男たちが慌てて見ると、確かに

新たな項目が出現していた。

「店舗建て替えに伴う臨時営業のお知らせ」

とある。

「建て替え!」

「臨時営業!」

くどいようだが、当の店主も従業員たちも、何も知らないのだ。それなのに掲示板では新しい情報が次々と公開されている。

「一週間後に中央座標で臨時営業を開始します」

またしてもテオドル以外の全員が叫んだ。

「中央座標!」

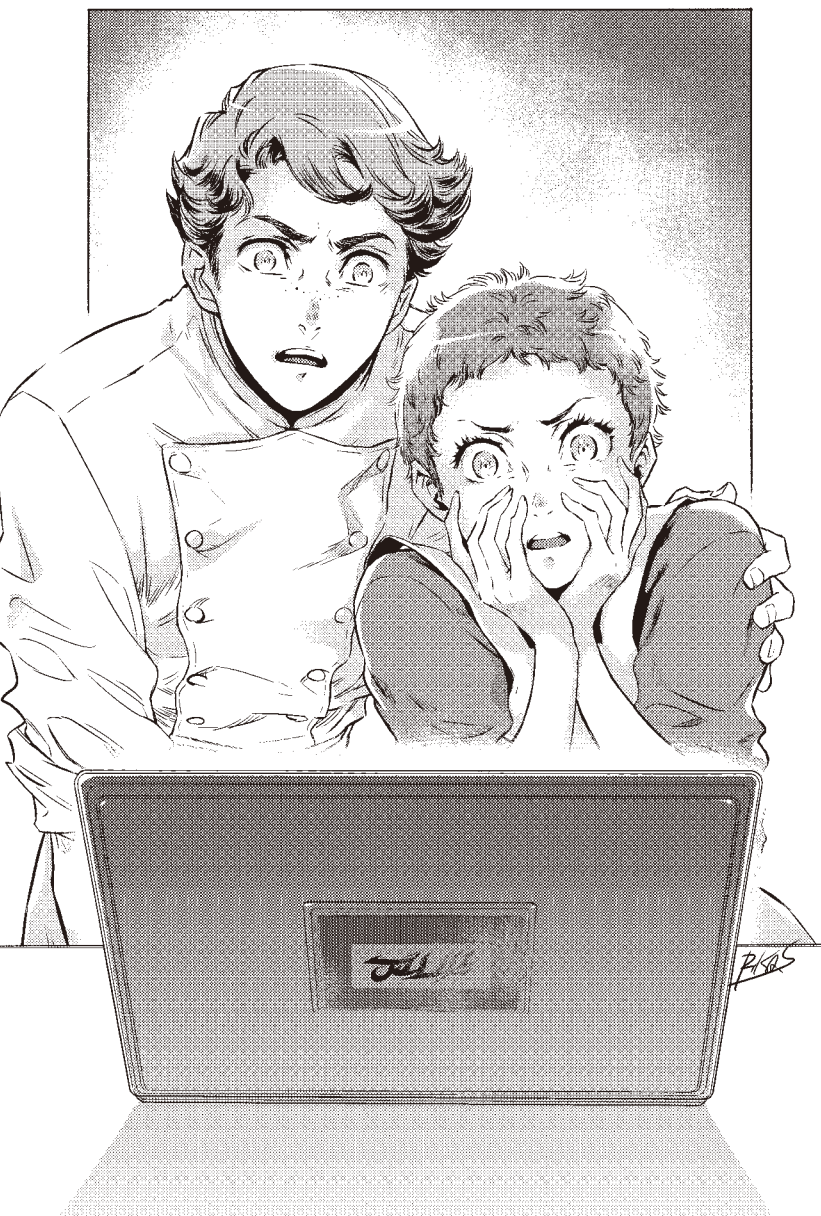
前述の通り、いくら日帰り可能とは言え、それは外洋型宇宙船を使わなければ行けない距離である。

掲示板の内容は店の人間たちの驚愕を置き去りに、  
どんどん進んでいる。

カレンダーが表示され、約三カ月間、予約を受け付けることある。

ただし、店舗の場所は非公開とも書いてある。

「ご予約の確定したお客さまにのみ、店舗の住所をお教えます。そのつもりでお申し込みください」というのだが、一口に中央座標と言っても、その



範囲は惑星丸ことになる。

つまりは、その日、惑星のどこであろうと（最悪、他の惑星にいたとしても）確実に予約時間には店に行けるといふ条件を満たしている場合のみ予約してくれというわけだ。

「大変！ 止めなきゃ……！」

カトリンは焦<sup>あせ</sup>って掲示板を修正しようと試みたが、驚いて手を止めた。

「嘘<sup>うそ</sup>!! 接触<sup>アクセス</sup>できない！」

再度試みたが、やはりだめだ。いつもの権限では掲示板を書き換えることができなくなっている。

カトリンはさらに悲鳴を發した。

「どうしよう！ 予約が始まっちゃった！」

彼らの眼の前で、カレンダーの日付に次々と予約完了の印が付いていくのである。

ここに至ってパラデューの顔が厳しくなった。

「ヨハン。警察に連絡しろ」

「えっ？」

「これは悪質<sup>いたずら</sup>な悪戯だ。れっきとした営業妨害だ。警察の情報犯罪課に通報して誰がやらせているのか突き止めなくてはならん」

ヨハンは眼を見張った。そういう犯罪があるのは彼も知っているが、思わず首を捻<sup>ひね</sup>った。

「でも、そういうのって大企業とか公共機関とかが狙われるものじゃないんですか？ うちみたいな、小さな飲食店にわざわざそんなことしますか？」

「この店の人気<sup>あなど</sup>を侮<sup>あなど</sup>ってはならん」

断言したパラデューだった。

「この連邦大学惑星<sup>テイラ・ホーシ</sup>は治安のいい星として有名だが、性根のよくない人間はどこにでもいる。既に予約が始まってしまっているんだ。こんなものを放置しておいては店の信用問題に関わるぞ」

まったくもってその通りである。ヨハンが慌てて警察に連絡しようとした時、再び店の扉が開いた。

やや青ざめた顔つきで現れたのは、この店の常連、ジェイソンだ。ご近所の気安さもあって、こうして

開店前でもやってくるのは珍しくないが、今の彼は  
いささか様子が変だった。

パラデューがいるのを見てジェイソンは一人領き、  
何とも言えない顔で自分の携帯端末をかざした。

「……アンヌからメールが来たぜ」

「えっ!? うちの子が?」

カトリンが思わず言った。カトリンは若い母親で、  
アンヌという娘がいる。しかし、その娘はまだ生後  
三カ月の赤ん坊だ。メールなど打てるはずがないが、  
カトリンの知っているアンヌと言ったら自分の娘が  
真っ先に出てくるのは当然である。

だが、ジェイソンにとってのアンヌは違う。

彼はテオドールに眼をやって、ため息を吐いた。

「つくづく、すげえ女だよな、アンヌは。この店の  
建て替え時期まで考えてたらしいぜ」

ヨハンが顔色を変えた。

「……まさか、母さんから?」

ヨハンの亡くなった母親の名前もアンヌである。

ジェイソンは頷いた。

「ああ。そのまさかだ。今日になったら届くように  
設定しておいたらしい。……たまげたよ」

ジェイソンが差し出した端末画面に、店の全員が  
食い入るように見入った。

「これが届くってことはあたしはもう死んでるって  
ことだけど、驚かないでね」

こんなものを受け取った人間からすれば『これが  
驚かずにいられるか』である。

現にジェイソンは深々とため息を吐いている。

「危うく珈琲（コーヒー）を吹き出すところだったぜ……」

アンヌの通信文は生前の彼女の口調と同じように、  
てきぱきと明快に要点を述べていた。

老朽化（ろうきゅう）した店舗を建て直すこと。

隣のビルもすべてのテナントの契約が切れたので、  
かねてから計画していた美術館に建て替えること。

そのために隣の地下に保管されている一流美術館  
並の美術品と、愛好家が目の色を変える高級酒の

蒐<sup>しゅうしゅうひん</sup>集品を、一時的に保管倉庫に移し替えること。

その保管倉庫の名前と連絡先、建築業者の名前と連絡先が続き、最後にこう締めくくられていた。

「移動の際にも建築にも持ち主の同意が必要だからテオに署名させないといけないんだけど、彼一人に任せるのは論外だから、あなたも責任者代理として署名してほしいの。悪いけど、お願いね。テオには代わりの店を用意してあるから」

「代わりの店？」

ヨハンが思わず言い、カトリンがはつとなつた。

「まさか、あの掲示板!？」

「あ！」

パラデューが怖い顔で店主に言った。

「テオ、きみの端末を」

これだけ用意周到なアンヌが肝心<sup>かんじん</sup>の夫に何も言わないわけがない（その夫が実務能力皆無でもだ）。

テオドールは無言で自分の携帯端末を持ってきた。そもそも彼には通信文をやりとりする習慣がない。

携帯端末は通話手段にしか過ぎないが、アンヌが生きていた頃は違った。自分からは発信しなくても、妻からのさまざまな連絡事項を受け取っていた。

久しぶりに通信画面を開いてみて、テオドールは恐ろしく複雑な顔になった。パラデューの予想通り、亡き妻から通信文が届いていたからだ。

ジェイソンも含めて、皆いつせいにテオドールの端末を覗き込んだ。内容はジェイソンに来たものとほとんど同じである。

「その建物はそろそろ建て替えないといけないのよ。新しい店の図面はもう業者に渡してあるの。設備に関してはあなたの好みもあるでしょうから、希望を言えば取り入れてくれるはずよ。ただ、隣のビルの建て替えもあるし、取り壊すところから始めるからどうしても三カ月くらい掛かる予定なの。その間には他の店で料理をつくってくれる？ 店は中央座標<sup>セントラル</sup>に用意するから」

この文面を見せられたヨハン、カトリン、そして

パラデューは呆気にとられた顔を見合わせた。

ジェイソンが自分の端末を見ながら言った。

「……ここに載ってる業者に半信半疑で連絡したら、どうやら知らないのは俺たちだけって状況らしいぜ。

今日にも隣の地下の品物を引き取りに来るそうだ」

放心状態だったパラデューがここで我に返った。

「しかし、あれを全部保管するとなると大事だぞ」

何しろ量が半端はんぱではない。

加えて美術品も高級酒も環境の変化をひどく嫌う代物しろものである。温度も湿度も最適たもに保てるのが最低限の条件だが、ジェイソンは苦笑しながら言った。

「俺は存在も知らなかったが、世の中には高級品を専門に扱う保管倉庫ってものがあるんだと。建物は直下型の地震に耐えられる耐震構造、内部の倉庫は温度も湿度も一年中、希望通りに設定できるそうだ。入退館時には警備員と検知器による顔認証が必要で、監視装置が建物の中も外も見張ってるし、警備員も二十四時間常駐していて、ちょっとした要塞ようさいだぜ。

その倉庫の責任者つてのが言うには——『以前よりご相談のお品物をお預かりする準備が整いました。これからお伺いうかがします』だによ」

ジェイソンは深く嘆息して続けた。

「……依頼人は二年前に死んでるぜって言ったら、問題ないっていうのさ。代金は払い込み済みだし、『その場合は、あなたが代理人になつてくださると承うけたまわっております』だによ。引き受けるけどよ」

ヨハンとカトリンが息を呑のんでいる。

ジェイソンはパラデューを見て言った。

「親父さんがいてくれたのはちようどよかったぜ。預かる品物の目録を確認しなきゃならないそうだ」

「目録？」

「ああ。アンヌがいりゃあ、全部アンヌの頭の中に入ってるもんだ。目録なんか必要ない。数を数えて、『それじゃあ後はよろしく』って渡せばいいんだが、隣の地下にあるのは皿一枚でも目玉が飛び出るほど高いものばっかりだろう。こんなものを引き受ける

倉庫側としては絶対に間違いがあつちやあならないらしい。どんな種類のものをどれだけ預かつたのか、預かつたものを確実に返した証拠<sup>しやうこ</sup>を残す意味でも、どうしても一覽表をつくる必要があるつてわけだ。

そのために専門家を超越すそうだぜ。絵とか焼き物、骨董品<sup>こつとうひん</sup>だけじゃなく、酒の専門家も来るつてよ」

当然の配慮だと、パラデューは思った。

以前に隣の地下蔵をそつと見せてもらったことがあるが、アンヌが蒐集したという高級酒の数々には眼を見張らされたのだ。

ジェイソンは困惑の視線をパラデューに向けた。

「あちらさんは俺に立ち会いと署名を頼むつて言つてるんだが……赤の他人の俺より、親父さんが署名したほうがいいんじゃないか？」

「いや……」

パラデューは首を振った。

「アンヌはあなたを見込んで頼んだのだ。できれば、あなたにお願いしたい」

ジェイソンは頷いて、また端末を見た。

「まったくよう、死んだ後までテオの料理のことを心配してるんだからな……」

「母さんらしいや……」

ヨハンが苦笑しながらため息を吐き、カトリンはちよつぴり涙ぐんでいるようだった。

パラデューも同様の心境だった。

「で？ 代わりの店つてのはどこなんだ？」

ジェイソンの問いに、ヨハンが困惑の顔で答える。

「それが……誰も知らないんですよ」

「はあ？ そんな馬鹿な話があるかい」

訝しげに言つて、ジェイソンは端末を操作した。

ややあつて、彼は意外そうに言つたのである。

「……予約が取れたぜ。詳しい住所はまだ未定だが、場所はシテイだ」と

一同、驚いた。

セントラル中央座標のシテイと言つたら連邦お膝元<sup>ひざもと</sup>である。その警備の厳しさは文字通り共和宇宙一だ。

初めてこの市に入る人間は誰であろうと（たとえ国家元首でも）個人情報登録する必要がある。

好ましくない前歴があればその場で明らかにされ、たちまち身元を確認されてしまうことでも有名だ。

犯罪者がこんな場所を選ぶわけがない。

パラデューが唸った。

「……本当にアンヌの仕掛けで間違いないらしいが肝心の場所が未定とはどういうことだ？」

ヨハンが父親を振り返る。

「親父、確か昔、シティで働いてたことがあるって言わなかったか？ その時の店かもしれない」

しかし、テオドルは首を振った。

何も聞いていない——という意味である。

カトリンが不安そうに言った。

「まだお店が決まっていけないんでしょうか？」

ジェイソンが首を振る。

「いや、アンヌがそんな手抜きをするはずがねえ。

——どうなってるのかな？」

準備中の店の扉が三度、開いたのはその時だった。

入って来たのは一目で高級品とわかるツイードの背広に身を包んだ男だった。中背で、肉付きのいい体格で、服装の隅々まで神経が行き届き、ベストは背広と色違いの襟付きのダブル。光沢のある濃紺のネクタイを一分の隙もなく締め、靴は最上等の革、茶色の髪は美容師の手できれいに整えられている。

見るからに裕福な伊達者の雰囲気である。

人なつこそうな顔とよく輝く茶色の眼をした男は、開店前の店内に大勢の人がいるのを見て眼を見張り、意外な知人の顔を見つけて、驚いて挨拶してきた。

「これは……ミスタ・パラデュー。お久しぶりです。この店をご贖とは知りませんでした」

挨拶されたパラデューは記憶を探る顔になった。

「……確か、ポワールの息子さんだったか？」

「はい。ミシエルです。父がいつもお世話になっております」

「それはわたしの台詞だろう。お父上には稼がせて

もらっているからな」

新たな来客の名前はミシエル・ポワール。

父親のワイリップ・ポワールは共和宇宙で名前の知られた実業家だと、パラデューは一同に説明して、ミシエルに向き直った。

「きみも今度、新しい事業を始めると噂<sup>うわさ</sup>に聞いたぞ。ぜひ成功させてもらいたいな」

「もちろんです。そのためにテオの力を借りようと思っているのですから」

「何？」

ミシエルは一番奥にいたテオドールに眼を移して、親しげに笑いかけた。

「やあ、テオ。久しぶりだな」

その口調からただの客ではなさそうだと判断して、パラデューは訝しげに義理の息子を振り返った。

「どういう関係だ？」

答えたのはミシエルである。

「昔の同僚ですよ。もう三十年近く前になりますが、

わたしはアンリ・ドラランジュで——テオが料理長を務めていた店で給仕係をしていたんです」

パラデューは驚いた。

「というと、アンヌの元同僚でもあるわけか？」

「そうです。アンヌのほうが年下でしたが、厳しい先輩でしてね。ずいぶんしごかれましたよ」

そう言いながらミシエルの口調は楽しそうだった。パラデューにとつては寝耳に水の話だったので、思わず尋ねていた。

「ポワールの跡取りのきみがわざわざ給仕係を？」

言ってしまうてから、急いで付け加える。

「いや、決して給仕係を軽視するわけではないが、もっと事業に直結する仕事があるだろうに……」

「跡取りだからこそです」

ミシエルはちよつと苦笑した。

「我が家の財は給仕係から身を起こした父が一代で築きあげたものです。そのせいか、我が家は昔から『働かざる者食うべからず』というのが家訓でして、

わたしも子どもの頃から何かしら家の手伝いをして小遣いをもらっていました。大学では経営学を学びましたが、学費以外の生活費は自分で稼ぎましたよ。給仕係は人間観察の意味でも、世間を知るためにも最高の舞台だというのが父の口癖で、父の跡を継ぐ前に一度接客業を経験するように言われていました。アンリ・ドランジュで働きました。実際きつい仕事でしたが、今ではいい経験だったと思っていますよ。アンヌにしごかれたことも含めてね」

くすぐったそうに言って、ミシエルは尋ねた。

「——あなたも？ アンヌとテオとはその頃からのつきあいですか？」

「アンヌはわたしの娘だ」

呆氣にとられたミシエルだった。

「娘？ でもアンヌの旧姓はカルマンですよ！」

「妻の旧姓だ」

ミシエルはまだ啞然として、昔の同僚に迫った。

「……テオ！ 知ってたのか？」

テオドールは無言で肩をすくめた。

要約すると「俺が知るか」である。

パラデューに視線を戻してミシエルは言った。

「全然知りませんでしたよ！ ——するとアンヌもあなたの教育方針で給仕係をしていたんですか？」

「いや……」

ほろ苦く笑って、パラデューは首を振った。

「アンヌはいろいろなバイトをしていたが、いつも事後報告だった。独立心の旺盛な娘だったからな」

よく言えば放任主義、悪く言えば娘の私生活には興味を示さない父親だったと我ながら思う。

その結果、アンヌは父親と決別して、家出同然にテオドールと結婚したのだ。

そうしたこと詳しく語る気にはなれなかったが、ミシエルは驚きを消して、嬉しそうな笑顔になった。

「いや、これは迂闊でした。テオと義理の親子とは羨ましい限りです。それではあなたも昔からテオの鼻根なんですな」

ますます苦笑したパラデューだった。

長女とは長年、絶縁していたとは言いにくいので、さりげなく話題を変えた。

「きみはずっとアンヌと親交があったのか？」

「ええ。何度かこの店に食べに来たこともあります。——数年前になります、アンヌにわたしの新しい事業計画を話したところ、ちょうど時期も合うから協力させてほしいと言われたんです」

ジェイソンが自分の端末を掲げて見せた。

「するつてえと、こいつはあんたの店か？ 場所はシテイとしか書かれてないんだが……」

「そうです。正確にはホテル内のレストランです」

ミシエルは言つて、あらためて名乗った。

「ご挨拶が遅れました。ミシエル・ポワールです。ご予約ありがとうございます」

「ジェイソン・ニードルマイヤーだ。こここの店主とアンヌとは古い馴染みさ」

パラデューが訊いた。

「きみの新しい事業とはホテル経営か？」

「そうです。今までシテイにはなかった、まったく新しい形のホテルを目指しています」

ミシエルは得意そうに胸を張った。

「ホテル・パレスやカレーシユホテルに代表される大型の高級ホテルは既にシテイに何軒もあります。今から参入するのは容易ではありません。わたしが今回企画したのは、むしろ上質の隠れ家のようなホテルなんです。部屋数を少なく抑えて、日常からかけ離れた環境や料理、接待を提供し、お客さまに心からくつろいでいただける、第二の我が家として何度でも訪れたくなる、そんなホテルです」

「なるほど……」

単価を上げて、いかにリピーターを獲得するかが勝負の宿泊施設なのだと、パラデューは理解した。「建物は完成しているのか？」

「もちろんです。立派にホテルとして機能しますが、容れ物ができたからよしというものではありません。」

これから最低でも三カ月は教育期間オリエンテーションの予定です」

「三カ月か。それは長いな」

「いえ。ホテルにとつて接客はもつとも重要な売り物です。手を抜くわけにはいきません」

「うむ。立派な心がけだ」

頷いたパラデューだったが、ヨハンとカトリンは耳慣れない言葉に不思議そうな顔をしている。

「教育期間って……研修のことですか？」

「三カ月も？」

つぶや 呟いたカトリンにミシエルは笑って答えた。

「普通の研修とは少し違います。実際にお客さまを泊めておもてなしをするんですよ、お嬢さん」

「あ、いえ、わたしはヨハンの妻です」

カトリンが慌てて自己紹介をし、ミシエルは眼を見張って破顔した。

「あの小さかったヨハンが奥さんを持つたとは！わたしも歳を取るわけだ……」

今度はそのヨハンが質問した。

「教育期間で実際にお客さんを泊めるんですか？」

この疑問にはパラデューが答えた。

「格式の高いホテルともなれば、建物が完成して即開業というわけにはいかんのだよ。何より従業員の質が問われるのだ。どんなに優秀な人材を揃えても、初めて顔を合わせる者同士だからな。効率的な配置、互いの連携、作業動線、それらを確立するためには時間が必要だ。ましてや最新型のホテルともなれば、覚えなければならぬ設備や機能も相当なものだぞ。客もどんな質問をしてくるかわからん。思いもよらない要望を言ってくるかもしれない。周辺の地理や施設を知りたがるかもしれない。どんな客にも満足して帰ってもらわなくてはならんが、一流の接客というもののは一朝一夕でどうにかなるものではないのだ」

ミシエルも真顔で頷いた。

「おっしゃるとおりです。どんなに教育を重ねても実践じっせんに勝る模擬体験シミュレーションはありません。開業前に一度は満室にして稼働させてみる必要があるんです」

「試験客の当てはあるのか？」

「ええ。わたしの友人、それから父の顧客こきやくの中でも特に眼の肥えた方たちに協力をお願いしています。三カ月間で彼らの及第をもちょうことが最低限の目標です。もちろん料理もです。現時点で可能な限りの、最高の人材を揃えましたが、厨房にも接客係にも、実践を体験させたいのです」

「いかにも。やはり一度は満席にして稼働させねば、どこにどんな不具合が出るかわからんからな」

「おっしゃるとおりです」

真剣に頷いたミシエルだった。

「今回の件は何年も前からアンヌと相談して決めていたことです。アンヌの話では隣の美術館をかなり特殊な構造にしたいとかで、そうすると施工できる業者が限られてくるんだそうです。その業者がこの時期なら空あいている。わたしもちょうどこの時期に開業を考えていたので、互いに協力を約束しました。ですが、アンヌはその後……」

ミシエルは言葉を切って沈黙した。気を取り直したように苦笑する。

「驚きましたよ。死んだはずのアンヌからメールが来て、『約束を忘れていない？』と言うんですから。慌てて業者に確かめたら、当初の予定通りこの店を新築すると聞いて飛んできました。三カ月もテオの時間が空くなら遊ばせておくことはありませんから——実は、レストランの装飾がまだなんです」

パラデューの顔色が変わった。

身を乗り出して、断定的に尋ねた。

「きみは知っているんだな？」

目的語のない質問に、ミシエルは真顔で頷いた。

「はい。アンヌが話してくれました。テオは一流を見抜く眼を持っていると。実際、ここで何度か高級料理を食べたことがあります。料理と同じくらい店の調度品に仰天きょうてんさせられましたよ」

「きみの店はどのくらいの広さだ？」

ミシエルはちよつと苦笑した。

「少し変わった造りなんです。基本的にすべて個室でして最大客数は六十四人ですが、平常時の回転はその八割程度でしょう。八部屋あるので、一部屋に二人から八人まで通せます」

パラデューはちよつとがっかりした。

「個室か。ではあまり大きな美術品は置けないな」

「いいえ。個室はすべて二階にありまして、一階は広いホールなんです。ここは普段は使用しませんが、ゆくゆくはパーティに活用できればと思っています。ひとまず、教育期間中はここを臨時のレストランにする予定です」

いささか納得できずにパラデューは尋ねた。

「なぜ普段は使わないんだね？」

「個室のお客さまに料理を提供しながらパーティの料理を回せるほどの人手がないんです。とりあえず今集めた人材には晩餐に集中してもらいたいで」

テオドールが唐突に口を挟んだ。

「料理人は何人いる？」

「菓子職人、パン職人も含めて九人」

「それだけいて一階と二階を回せねえのか？」

ミシエルは呆れたように抗議した。

「きみと一緒にされては困る。うちが提供するの、シテイのどんな高級料理店にも引けを取らない、華麗で繊細な料理なんだ。かつてのきみがアンリ・ドランジュで出していた料理を超えるのは無理としても、あれに匹敵する料理を出したい」

そうした料理は一皿に恐ろしく手間が掛かる。

とてもパーティ用の『同じ料理を大量につくる』作業と並行はできないというわけだ。

パラデューはそれでもまだ疑問の表情だった。

「しかし、新装開店するレストランの一階ががらんどうなのか？ ずいぶん奇妙なつくりだな？」

「ええ。――率直に言いますと、わたしの失敗です。最初は一階を主にしてアンリ・ドランジュのようにテーブルをずらりと並べる予定だったんです」

よくある一般的な高級レストランのつくりだ。

ところが、宿泊モデルを頼んだ著名人たちから、食事は個室にできないかという要望が相次いだ。

ここは隠れ家ホテルなのだから、食事も気の合う少人数で楽しみたい。さらに可能なら、周囲の眼を気にせずに料理を味わいたいというわけだ。

ミシエルは両手を広げて肩をすくめてみせた。

「まったく迂闊でした。しまったと思いましたよ。

言われてみればもつともな話で、社会的に成功した方々が何より貴重とするものと言えば、報道陣や、あまり親しくない業界人らに煩わされることのない完全なる私生活上の自由の保証です。そのつもりでホテルを建てたのに、レストランには既存の概念を持ち込んでしまった。痛恨の失敗でしたが、しかし、失敗は回復できます」

開業したら、当面、一階は豪華な広間の雰囲気を活かして一流の美術品を展示し、料理が始まるまでのくつろぎの場所として提供する予定だという。

またテオドルが訊いた。

「給仕係は何人だ？」

「十五人だ。ただし、臨時レストランは広いからね。ソムリエを入れて二十一人用意する。その人数が自由に動き回れるように、机はかなり離して設置する。ちなみに一階部分の天井高は五メートルある」

パラデューが顔を輝かせた。

「そうすると、かなり大きな美術品が置けるな？」

「そうなんです」

ミシエルも真剣な表情だ。

「逆に二階の個室には小さくとも一流の品を置いて、部屋ごとの個性を出そうと思っています。店構えやそうした美術品は料理よりも先に、客に強い印象を与えますからね。迂闊なものは置けません」

パラデューは力強く頷いた。

「その一流の美術品の購入先に当てはあるのか？ わたしも協力させてもらおう」

ミシエルは快哉を叫んだ。

「ありがたい！ ぜひお願いします」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF  
形式で、作成されています。この続きは  
書店にてお求めの上、お楽しみください。